

# たくみ

## Craftsmanship

特集 瀧田史字作陶展  
 特集 民藝運動の作家と職人の仕事展

第22号

### 「チャングムの誓い」と 韓国の宮廷料理

さいきん韓国の連続テレビドラマが人気で、「冬のソナタ」や「チャングムの誓い」が話題となった。

とくに「チャングムの誓い」は十六世紀頃の朝鮮王朝を舞台に、宮廷女官チャングムの波瀾多き一生を描いたものである。全五十四話の物語は女官チャングムをたて糸に、権謀渦巻く宮廷の争いと庶民の暮しを巧みに織り交ぜたもので毎回見逃せぬ面白さがある。

それとその主な舞台が李王朝の十一代の王、中宗の内厨房と内医院だから、朝鮮の宮廷料理の食材や調理の仕方も興味深く、また病弱な王や皇太子にかかりきりの医務官や医女たちの話も初耳のことばかりである。

チャングムは亡き母の志をついで厨房の女官となり医食同源の料理を極めるが、陰謀に巻き込まれ地方で医術を学び再起して宮廷に戻る。そして最後

には中宗によって大長今テチャングムの称号を与えられ、王専属の医師となる。この女医大長今の名は李朝実録にあるという。

もう一人、実在の人物をモデルにしたのはチャングムの師匠ハン尚宮ハンサングンだが、本物は李朝最後の王純宗の王妃、尹妃ユンヒの内厨房の責任者で韓熙順ハンシユンといった。この人は寡黙かつ厳しい女性で、自分から教えることはなかったという。

この韓尚宮について滅びつつある最後の宮廷料理を学び、さらに深め記録に残したのが黄慧性であった。彼女は戦前の李王家内廷の数少ない証人でもあつて、一九七三年に「朝鮮王朝宮中飯食」技能保存者として韓国の人間国宝に指定されている。

こういった宮廷内房と料理の話、十年ほど前に石毛直道(国立民俗学博物館教授)が黄慧性からの聞き書としてまとめ、二人の共著で「韓国の食」(平凡社刊)を上梓した。韓国料理にはまることうけあいである。

(志賀直邦)

たくみ企画展

## 瀧田史宇作陶展

会期 平成十七年十二月三日（土）～八日（木）

十二月四日（日）は営業いたしません。

会場 たくみ二階サロン

営業時間 十一時から十九時まで（日曜日・最終日は十七時半まで）



赤絵魚文皿

### 作陶家として

### いま思うこと

瀧田 史宇

私は、生まれた時から民藝品に囲まれて育ってきました。生活の中に民藝の物が溢れ、父は作陶家として民藝の世界で活躍していました。私にとつて民藝は特別な存在ではなく、ごく普通にそこに存在して居る物なのです。

この事は先人の生活では当たり前のことであり、取り立てて注目されるもの

ではなかったのではないのでしょうか。ただその中でも先人達は如何に、人々の暮らしの中で自分達の作った物が使われるかを第一義に考えながら作ったのでしょうか。

民藝という言葉で表される工藝品が今、我々の前に柳先生や濱田先生、外村先生、等の民藝運動の先駆者達によつて、テーブルの上に出され改めて見直されたわけです。

今の世の中のように、最先端の技術で作られ出された物や国際的な物流によつて低賃金の国々から安価な製品が大量に流入してきている、今の日本の中で、民藝の世界は、今後どのように歩んでいくべきなのか。われわれ作り手は、どのような気持ちで物を作っていくべきなのか。今、若い工人たちは悩んでいます。

昨今、スローライフ、スローフードなる言葉と生活様式が注目されてきま



瀧田史宇さん

した。私は、昔のような心にゆとりのある生活に戻りましょう、と訴えていと解釈しております。

私がかつて、勉強したスペインでは、当時まさに嘘のような生活がされていきました。食事は二時間近くかけ、週末は郊外の別荘に出かけ、夏休みは一月あり、それもきちんとして法律で定められていました。

まさに、スローライフ、スローフードです。彼らは「人生を楽しむために

仕事をやるんだ」といい七時には（日本の終業時間、五時と同じ感覚）会社の門を出て行きました。決して当時のスペインは、先進国の中でも豊かな国ではありませんでしたが、大変心の豊かさを感じました。

当時、スペインでは工芸品を見直す運動が国の指導の下で始まり、地方の優れた工芸品を国が認め、国営の販売店で売るようになりました。その経営は決してお役所仕事ではなく、独立採算制で、購入から販売まで店長にまかされていきました。販売店は各地方の観光地や都市にあり、地方性を重視した品物が並べられていました。国を挙げたその国の工芸品を保護する動きは、スペインだけではなく、他のヨーロッパ諸国でも見受けられマイスター制度などもその一つです。日本では伝統工芸士がそれに当るのでしょうか、選出される視点が少し違うような気がしま

す。欧州でその事に携わる方々は良く勉強していますし、長く携わる方々が多いようです。

マイスターは、ただ単なる称号ではなく荣誉と誇りが与えられるので、マイスターが与えられるとその称号を汚すまいと精進するのです。社会的地位も高くなります。

ただし欧州には、民藝にあたる分野がなくクラフトになってしまいうです。従って日本のように工藝が多岐にわたっている国は少なく、民藝の分野など他の国にはないのです。

我々は今後、この、世界に類を見ない分野、民藝をどのように継承していかなければならぬか。私にはまだ答えが見えませんが、極めて難解な問題でしょうが、今の民藝は、民藝という言葉だけが一人歩きし様式化してしまつたため、本当の仕事が置き忘れてしまつたように思えるのです。

# たくみ特別企画 民藝運動の作家と職人の仕事展

会 期 十一月二十三日(水)～二十九日(火)  
会 場 たくみ二階ギャラリー  
営 業 時 間 十一時から十九時まで  
(祭日・日曜日・最終日は十七時半まで)  
作 家 柳宗悦、濱田庄司、富本憲吉、バーナード・リーチ、  
芹沢銈介、金城次郎、河井武一、岡村吉右衛門  
品 目 陶磁器、掛軸(書、型染絵)、額装(仏画ほか)、  
民藝古作品、山陰の古布、海外の布や雑貨ほか  
書 籍 工藝、美術関係図書、図録、雑誌工藝、民藝、  
民藝手帖ほか

民藝運動がはじめられて八十年、その間民藝の同人によって育てられ、あるいは新しく創作されたものは数限りなく、その思想とともに私たちの今日の暮らしと生き方に大きな影響を与えております。それらの作品や関係図書を集め展示即売いたします。



バーナード・リーチ 兎文皿



富本憲吉 染付皿

芹沢銈介  
蛙の字



柳宗悦  
心喝



バーナード・リーチ  
兎文絵



金城次郎 七寸皿

## 「竹富島と民藝協会」

### そして町並み保存のこと

#### 上勢頭 芳徳

ここ数年、六月には上京するのが恒例になっています。日本最南端に程近い小さな島に住んでいますと、たまの上京は楽しみです。今年は六月十日から十二日まで民藝夏期学校が那覇と読谷で開催されましたので、それに参加してからの上京でした。

夏期学校は久しぶりの沖縄とあって全国からも多くの方が参加しておられました。富山民藝協会はその前の八日に、水木省三会長はじめ五名が一泊しながら竹富島へ来てくださって、那覇でまた合流しました。

竹富島は現在人口約三五〇人(十三年連続増加中)ですが、観光客は年間三十五万人も訪れています。これだけ知られるようになったのも、一九五七

年十二月に外村吉之介先生が初めて竹富島へ来られ、まだこんなところがあつたかと全国に「民藝の島」として紹介されたのが始まりです。

キリスト教の牧師さんと日本最南端のお寺の坊さん(上勢頭亨です)との、島にとつての幸せな出会いでした。以後外村先生は何度もツアーを組んで会員を竹富島へ連れて来られました。

上勢頭家はそのたびに「竹富民藝館」として、それまでに島民が作りためていたモノの展示即売会場となりました。先生はミンサー織りや芭蕉布の復活に尽くして下さいましたし、伝統的な赤瓦の家並みの重要性を教えられました。

ことに一九六四年(昭和三十九年)

那覇での民藝協会全国大会のあと八十名が大挙して来島されたのは一大事件で、沖縄タイムス紙も「さすが民藝の島」と一ページを使って大きく扱っています。一九七二年の本土復帰前後に島の土地が島外資本に買占められようとした時にも「文明の火中に身を焼くまいぞ」という檄文を朝日新聞の論壇に投稿されました。ただ口先だけで、守れ、大事にというだけでなく、つくつたモノが売れて生業として立ち行くように、景観も守れるように行動してくださいました。

だからいま竹富島がこうしてあるのも、外村先生のおかげといつても過言ではありません。これまで竹富島で夏期学校を二回開催しましたが、島外からの参加者がいずれも八十名を越したのも、外村先生がいつも竹富、竹富と言ってくださいていたからでしょう。島の恩人のお別れ会には私らも夫婦で倉敷へ参列しましたが、その前夜に志

賀直邦さんとお会いできたのも外村先生とのご縁だと思えます。

今回の上京は東京竹富郷友会（島の出身者の集い）の八十周年記念総会への出席が主な目的でしたが、せっかくな高い費用を掛けてきたのだからとあちこち駆け回りました。中学校と高校三校で特設授業を行いました。島の自慢話を生徒の皆さんが居眠りもしないで聞いてくれるのは快感でした。

そして大武健一郎国税庁長官と河合隼雄文化庁長官を、いずれも単独で訪問できました。「竹富島」と言う看板があるからアポも取れるのですね。快感と緊張感を引きずって帝都を電車、地下鉄で走り回っているうちに、四日目には足がはれ上ってしまいました。島ではわずか一〇〇メートル先までも車に乗ってしまうのです。都会の人は本当によく歩くものですね。

今回は特にたくさんの成果でしたが、最後の仕上げは駒場エミナースで

の民藝協会全国大会でした。当日申込みで迷惑をおかけしましたが、水尾

会長、福本専務理事、横森賢、和子夫妻など沖縄夏期学校参加の方々とはここで再会でした。そうはいってもそうそうたる人たちのおおろおろしていたのを、福本氏は司会をしながら皆さんの前で、一番遠くから来た人といつて紹介して下さいましたので、懇親会の場ではよほど気が楽になって少しは打ち解けることができました。こういつた心遣いも民藝の心なのでしょか。

その場で志賀さんとも久しぶりの邂逅でした。帰ってから「たくみ」誌のバックナンバー一式を送付いただき、何か書くようにとのことでした。観光客からも、南の島は時間の流れがゆっくりしているとと言われるのを本気にして、こんなにも遅くなってしまうました。各号や、また月刊「民藝」を読みながら、今さらながら民藝の方々の沖

縄への思い入れを嬉しく感じ入っているところです。

私は小さい資料館を預かり、亡き岳父が外村先生や民藝の方々の影響でやって来た島の町並み保存運動に関わってきたくらいで、民藝についても耳学問でしかありません。しかし民藝運動と町並み保存運動とは共通するものとの認識で、これからも沖縄の伝統的な美しい町並みを守りながら、その中で伝統的な手仕事と祭事が継承されていく島づくりを支えていく覚悟です。

九月は結願祭、世迎い、節祭、十五夜祭、それに全国で最も早くから始まったと思われる第八十二回敬老会と祭事行事がめじろ押しに続きます。そして十一月には島最大の祭り、重要無形民俗文化財の種子取祭が控えています。これからもみなさまの一層のご支援をお願いいたします。

（竹富島喜宝院菟集館）

## たくみと二人のアメリカ人(二) ベス・ブレイクさんのこと

志賀 直邦

前号に東洋の美術や日本の民藝の良き理解者であり、ある意味で恩人でもあったラングドン・ワーナー博士のことをすこし書いた。ワーナーさんがたくみに来たという記録はないが、彼が日本の民藝、そして日本民藝館に寄せ

た熱い思いについて亡き中尾信氏(英文ガイド紙アート・アラウンド・タウン主宰)が雑誌「民藝」(358号)によせた文章があるので一部を紹介したい。

一九四八年のある寒い日に、戦後は



たくみ店頭で雪沓を手にするブレイクさん

じめて民藝館を訪れたワーナー博士を中尾さんが案内した時のこと。門前でジープを降りるなり、両手をひろげて「おー、よかった、よかった!」と叫び、靴を脱いで館内を見て廻り、二階のロビーの長椅子でくつろいださい、

「東京で上野の博物館と駒場の民藝館が焼けなかったことは、私にとつては京都と奈良が助かったと同じくらい嬉しいことです」と言ったという。

また中尾氏はワーナー博士の著作、「不滅の日本藝術」から次のような部分を紹介している。

「私が日ごろ民藝に傾倒しているのでワーナーは、在銘の傑作よりも民藝をひいきにする、との非難を招く恐れのあるのを私はよく知っています。だからここで私は、在銘の傑作の方が定義的にはすぐれている、と申し上げておきましょう。」とのべた上で、素朴な藝術つまり民藝品に宿る新鮮な喜びについて語り、さらに「真の民藝には、官能への溺れもなければ、感傷主義の甘さもなく、また、異常で変態なところもない。最もすぐれた民藝に見られる単純さは、実は粗野とわけが違うのです。それは煎じつめた精髓なのです。」と書いている。博士の民藝への





たくみ3階ギャラリーで黄八丈展を見るブレイクさん(右から三人目)とサロン・ド・ブランタン仲間たち

理解が本質的なものによることがよく解る。

ブレイクさんはたくみにとっても、また日本民藝館にとっても忘れることのできない恩人であろう。彼女はもとはアメリカの、アリゾナ州フェニックス

ス市の美術研究部長だったというから柳宗悦とも戦前から知己であったのかも知れない。しかし戦後間もなく来日した当時はアメリカ赤十字社の婦人部長であったという。

さて敗戦直後の日本では、連合軍施設のための住宅接収がかなり広く行われていた。そして民藝館もその対象となつたのである。柳は書いている。

「去年の十一月の下旬、一ノ関の宿で『接収』の電報を受取つた。民藝館西館と拙宅との接収である。」柳は急ぎ帰京してあらゆる手だてを尽くしたが、「併し凡ての努力は無益であつた。今年に入つて再度の命令をG4(総司令部参謀4部)より受け、三月二十日を期限に移転せねばならなくなつた。」

「所が三月十三日の夕方であつた。私の不在中ブレイク夫人の来訪を受けた。混雑の有様を見、又私の妻から事情を聞かれて大変驚かれ、『直接司令部の方に話合つてみよう』とのことで

あつた。」そしてブレイクさんは翌朝英国人ブライス氏を伴つて柳との打ち合わせに来訪、さらにGHQに行かれ間もなく秘書官のバンカー大佐を伴つて再び来館された。そのような経緯があつて、期限前日の三月十九日、民藝館は接収解除の報を受けたのであつた。

このことによつてバーナード・リーチは著作「日本絵日記」の中で、その時のブレイクさんのてきばきした働きを称えている。このお二人は、一九五三年六月に柳の誘いで鳥取で開かれた民藝協会全国大会にも参加している。

ブレイクさんは民藝品が大好きで、日本各地の作り手も訪ねているが、たくみにもお仲間の婦人たちを伴つてよく来店されていた。とくにアメリカ本土に送るクリスマス・ギフトになかなか良い品がないということだたびたび柳に相談したという。

彼女は米軍高級将校夫人たちの美術愛好のクラブ、サロン・ド・ブランタ

ンを主宰していて、柳の発案で、彼女たちのアイデアとセレクトで、日本の民藝品と郷土玩具を中心としたクリスマス・ギフトショウを何回か開いている。濱田庄司の窯や地方民窯の電気スタンドや芹沢工房の卓布、型染め紙、カレンダー、カード、扇子などもその折の産物だったのではないかと思う。

ブレイクさんは「たくみ」誌には一九五四年三月号に「船木父子の作品」という一文を書いている。また柳宗悦の逝去にさいし、一九六一年九月号の「民藝」に「柳宗悦を憶う」という追悼文を寄せている。民藝運動の今日あるにおいて、これら外国の方たちの助力を忘れてはならないと思う。

## 船木父子の作品

### ベス・ブレイク

戦後の日本で集めることのできる優れた陶器の展示会が、しばしば「たくみ」で公開される。特に毎年恒例の催しものである船木父子（道忠、研児）の作品展では、日本の釉のもつ深い緑や黄や茶と自然の土の色が、いっそうその輝きをみせている。

その美しい土の色と燦然たる釉のためか、あるいは個々の作品自体の形の

美しさのためか、とにかく薄暗い階段を上って一步会場へ足を踏み入れるとそこには、どこの国の人であれ陶器を愛する人にとっては一瞬パツと目の覚めるような光景がくり広げられる。特にその形と模様は見る人を喜ばせる。一旦会場へ入った人は、父、道忠の幾何学模様と、息子、研児の絵画的な輪郭の美しさによって、せきたてられ

るように会場を大急ぎで一巡し、それから再びはじめにかえって今度は一つ一つ丹念に楽しみながら見ていく。

この展覧会は、これらの陶工の作品の単なる美しさとは別に、一つの仕事の完成を示している。陶器の研究者ならここですぐ西洋の民族工藝の陶器が、この二人の陶工の手と心によって日本の民藝と融け合って生まれ出た事を知ることができる。このような手工藝は船木氏のような陶工の心によってのみ育てられるのではないかと思う。

島根県の日本海に面した松江市の近く、宍道湖のほとりに船木一家は住んでいる。朝鮮文化が初めて日本の土に接した出雲大社の近くで、船木氏の祖父は家業の焼物作りに従事していた。長年の間彼は陶工としてよく知られていたが、息子の道忠氏は画家となっていて、二十年間家業を継がなかった。

道忠氏が三十歳の時、益子の有名な陶工濱田庄司氏が、当時初来日中の



クリスマスセールの買い物を終えてたくみを出るブレイクさん

バーナード・リーチ氏を伴って船木窯を訪ねた。リーチ氏はこの時、自分の国と同じ釉を使い、また十七世紀のイギリスの陶工やアメリカ初期の陶工たちの手法とよく似ている釉掛けを行っているのを見て非常に驚き、そしてこれが動機となってリーチ氏は、ここで

四カ月間とどまって仕事をした。

やがて船木氏はリーチ、濱田両氏の説得で、自分の父の仕事である陶器作りに専心するようになり、また民藝運動の仲間にもなったのである。

リーチ氏は、一九三四年の二度目の来日の時、再び船木氏を訪れた。この

時は一年近くこの地に滞在してともに仕事をした。船木氏の模様や釉が伝統的な英国風の形やデザインによつて影響されたのはこの時期である。

豊富な窯焚用松材とこの地から採れる釉の特殊な色、そして船木父子の鮮やかな手捌きでそれは作り出される。

父と同じく画家を志していた研児氏は現在二十八歳で、小さい時から家業の手伝いをしている内に、その同じ力強い土と地方色豊かな深みのある色調の中から、彼自身の形と模様を創りだした。

道忠氏は、いま五十七歳で研児氏と同じくその温和な風貌は、会う人にとっても親しみを感じさせる。また事実彼らはとても良い人たちである。

この人たちの手になる作品を身近において使うことは、それが陶器の研究家であれ、または単に日本の陶器の美しさに魅せられた人であれ大きな喜びであることは疑いない。

たくみ歳時記

韓国・朝鮮の真鍮の食具

朝鮮半島では昔から食事のさい金属の匙や箸を用いてきたことは、よく知られている。ドラマ「チャングムの誓い」でも匙、箸だけでなく蓋物や鉢などにも真鍮(銅と亜鉛の合金、黄銅ともいう)の品が使われていた。

日本にも奈良時代に伝えられたが、木製品が中心のわが国では普及せず、正倉院には束になつて括られたままの佐波理(銅と錫の合金、白銅ともいう)の匙が収蔵されている。



それにしても朝鮮の金属の食具は美しいフォルムである。そこで戦前からそれを模して日本国内で作ることも行われた。それら内外の品から手元にあるいくつかをご紹介しよう。

箸と匙のセットは北朝鮮の品(写真上) 一組二一〇〇円。

小ぶりのしゃれたスプーンは韓国製(写真中) 各一本一七八五円。

れんげ風の匙と角砂糖ばさみは戦前の形を模して高岡で作ったもの(写真下) れんげ 三四六五円。角砂糖ばさみ 三四六五円。

いずれも可憐で実用的な小品である。

あとがき

今号にとりあげたベス・ブレイク夫人は柳宗悦の極めて親しい友人であった。民藝館の西館と柳邸の連合軍による接収にさいし、総司令部に直接働きかけ、その即日解除を勝ちとつたことなど、柳は後のちまでも恩誼に感じていた。昭和三十一年十一月、彼女の再来日のさい、ブレイク夫妻とブライス教授を柳夫妻は赤坂ざくろに招きご馳走しているが、その折りの写真が「民藝」(五十七年十月号)に出ている。ブレイク夫人の主宰したサロン・ド・フランタン関係の写真はたくみにもあつて、その内の何枚かを今号に紹介した。山形の櫛引村の蒲雪沓を手にした写真などいかに楽しそうではほえましい。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)